

## 第一百十話

### 藤原保輔同齋明事付匡衛手負季孝横死事

『前太平記』上 卷第十七 三四二頁から三四六頁より

#### [保輔齋明、盜賊の首領と成る]

この時に右京亮<sup>(老)</sup>保輔という者がいる。左京大夫<sup>(武)</sup>藤原致忠の四男ならびに保昌の弟である。また、右兵衛尉<sup>(参)</sup>齋明というものがいる。この者は保昌の兄齋光の長男である。父に先立たれて孤児となる。保輔にとっても甥であったが、二人とも力量早業は生まれつきのもので(→天性の名人)である。弓馬打ち物は武家に生まれた

二人共に力量早業は天性たる処なり。

ので、愛好するのは当然のことであるが、その心は隙間がない程に悪意に満ちて、

好むは実にも理なれども、

其心飽くまで姦凶にして、

二人とも父兄の注意に背き、徒党を組んで、人を集め、洛中は申し上げる必要もな

各父兄の誠めを戻り、

党を建て衆を結び、

洛中は申すに及ばず、

く、あちらこちらに勝手きままに振舞って行き来する人を追い討ちし、あるときは

在々所々に横行して、往来の人を逐ひ討ちし、

或ひは

人の重宝をほしいままに強奪する。仮に、これ(宝)を与えないところ、すぐにそ

人の重宝を貪り取る。

の人を殺し傍若無人に行動したのだった。保昌はいつも制止を重ねるといっても、

保昌常に制止を加ふと雖も、

進んでこの二人を登用することもなく、ますますほしいままであったので、過ぎ

敢へて之を用ひず、

愈縦逸なりしかば、

去った天禄の始めのころに辞令があつて、二人を共にどことも知れず追い払い、勘当されてしまった。それゆえ、身を置く場所がなく、山野を居住地として、もとか

されば一身を措く所なく、

素より

ら好む剥ぎ取り、追い討ちをして、体と生命を保ち（→生計を立てて）、最後には

好む剥ぎ取り逐ひ討ちして

身命を繋ぎ、

強盗の頭となって、たくさんの徒党を従え、天慶の西戎<sup>(肆)</sup>に劣りもしない悪者である。

## 【保昌と保輔】

ある時保昌は、頼光朝臣のお住まいに行つて、夜が更けて帰られたが、西洞院高辻<sup>(伍)</sup>であの保輔に出会つた。保昌は勘当した弟であつたので、わざと見ないふりで通り過ぎていった。保輔はまた悪心が生じて、自分の身の過ちを忘れ、この数年も

の間の自分の身の置き場のないことも、ひとえに保昌のせいであるので、今出会ったのを幸運として、討ち殺して胸の内のふさがりを晴らそうと思い、後からつけて歩いていった。元々保昌は勇猛であることが世の中でも勝り、その姿（→雰囲気）は普通でないために、少しの間も油断の色を見せなかったもので、それほどまでに保輔の心は気後れし、とうとう討ち殺すことはできなかった。保昌は私宅に帰って、保輔を門に手招いて申し上げたことは、「お前の心は欲深く人道に背いていて、進

「汝が意貪戻にして、

んで主君や父の命令に応じることもしない。その上、盗みを勤めとする。一族の不

敢へて君父の命に順はず。

剩へ

盗窃を事とす。

一家の名折り、

名誉、末代までの恥である。しっかりと今後は用心しろ。今夜お前は私についてこ

末代までの耻辱なり。

固く向後を慎むべし。

今夜汝、某に従ひ此に

こに来た。その心持ちはひとえに私を殺して着物を剥ぎ取ろうと思っているな。お

来たれり。

其志偏に我を害して衣裳を剥ぎ取らんと思ふにあり。

前が欲しいと思う物であるので、これをくれてやろう」と言って、着替えの物を取

汝が欲する所の物なれば

之を賜ふべし」

り出し、今まで着ていた小袖を脱ぎ変えて保輔の前に置く。保輔も流石に恥ずかしく顔向け出来ないと思ったのだろうか、一言も言えず、俯いたままでいたのだった。保昌は、「このような愚か者を生かしておけば一族の恥である。切り捨ててし

「斯様の嗚呼の者、生けて置かば一家の瑕瑾なり。討つて棄てもやせん」

まおうか」と思ったが、保輔の普段の強く盛んな振る舞いにも似ず、しょんぼりと

保輔が日來の強盛にも似ず、

塩々として

して話をお聞きして座しているところ、そうは言ってもやはり肉親同胞の情けとし

伺ひ居たるに、

さすが骨肉同胞の情けとて

て不憫と思わずにはいられなかったので、そのまま言い切つて中に入ってしまった

不便に思はれければ、

其儘に云い棄てゝ内に入りける。

た。保輔はしばらく呆然として座っていたが、さっと首を持ちあげ周りを見て、その小袖を取つて膝にある埃を払いのけ、再び行方知れずとなつてしまった。

## 【久我暁の狼藉】

ところが、寛和元年四月の中旬の午の日の八幡神社の臨時の祭り<sub>(陸)</sub>であるために、藤原季孝、大江匡衡、二人は連れ立って、山崎の離宮<sub>(漆)</sub>に参詣して、漢詩を作り詩文を朗詠し、一日中法施を申し上げ、夜になって帰京する。時分は四月二十日ほど、まだ宵闇のぼうっとしている時で、久我暁を通過するといつて、誰としても分からない兵七八十人が、行こうとしていた道に立ち塞いで、(鞘から)抜かれ並ん

抜き並べたる鋒は、

でいる刃先は、星の光に輝いて、尾花<sup>(捌)</sup>のはしっこのようだ。思い当たらないこと

星の光に輝きて尾花が末の如くなり。

であるので、番頭<sup>(玖)</sup>・仕丁<sup>(拾)</sup>、何事であろうかと狼狽して、進むことが出来ず、敵は思いがけずに近づいて、「足手まといの若侍ども、命も惜しいと思ひ、主のた

「腰がらみの青侍原、命も惜しく

めを思うならば、着物を脱いで通るのだ。さもなくば、一人も通らせまいぞ」と

主の為を思はず、衣裳を脱いで通るべし。さなくは一人も叶ふまじきぞ」

声々に呼び続けた。匡衡の下男、平延尚は布衣<sup>(拾壹)</sup>の袖を荒々しく掴んで捨て、

「見苦しい奴らの戯言だなあ。大口を叩くのも相手に応じて変えるべきだぞ」と

「憎き奴原が雑言かな。広言も逢手に依つて違ふべきぞ」

太刀を光らせて切りかかる。「それ、何も言わせるな。討ち殺せ」と言って、大勢でぱっと押し寄せ、中に閉じ込め戦うのである。雑人下男はみっともなく輿を投げ捨て逃げ散らばった。匡衡も季孝も輿から下りて立って、狩衣の露<sup>(拾貳)</sup>を襟にかけ、太刀を抜き準備して待機される。延尚は熟達している優れた人で、大勢に取り囲まれたのに、まだ一箇所も負傷しておらず、前後左右に張り合って、火花を散らして切って回る。若侍たちはこれに勢いづいて、延尚の後に付き従って、自分も引けを取るまいと戦ったのだった。

## 【匡衡の従僕主人を救う】

伏兵の首領藤原保輔並びに斎明らは、他の場所の田の畔から遠く回り込んで、二人を狙って走り近づく。匡衡、季孝は少しも動揺せず、受け流しては戦った。元々勇敢で気力を奮い立たせる強い男性と風月を好む才人と、一騎打ちの形式的な戦、釣り合うことが出来るとも見えなかった。当分は勝敗を決することはなかったところに、斎明の刀を季孝が受けのがし、着ていた烏帽子を目の上まで切り下げられ、(烏帽子を)かなぐり捨てようとする間に、斎明がぱっと近寄って、むんずと組み打ち、どうしようもないように押し付けて首を搔き切る。式部の大夫匡衡は左の指を切り落とされ、片手で持った刀で切って、打ち払い打ち払いなざるのを、保輔はせせ笑い、太刀をカランと投げ捨てて組み合って掴み押さえ込み、もはや危なく見え

保輔ゑせ笑ひ、 太刀をからりと抛げ棄てゝ、引つ組むで取つて押さへ、 既に殆く見へし処に、

たところに、延尚は皆さんの御力量が不十分で物足りなく思つて、大勢を切り抜け

延尚は人々の御事意許無しとて、 大勢を切り脱け

走つてきて、この様子を見て、保輔の兜の正面の内側に手をかけて、首を切り取る

走せ来たり、 是体を見て 保輔が内兜に手を掛けて、 首を搔かんと仕たりしを、

うとしていたのを、保輔は搔き切られまいと、延尚の手をガシッと握り、上へと下

保輔搔かれじと、 延尚が手を丁ど握り、 上と下へと

へと組み合った。場所は左右とも泥の深い田で、畔の細道であったので、保輔は足  
組み合ひけり。

を踏み外して田の中へ転び落ち、組んでいる手を離さないで、二人ともいっしょ  
に落ち重なって、かさねかさね深い泥の中で時間が立つまで揉み合った。この間に  
若侍たちは、あちらこちらから引き返して、匡衡を連れて逃げて行く。斎明は逃す  
まいと追いかけたが、斎明は「いやいや、それほどの恨みもないので、逃げるなら

「いやいやさせる宿意もなきに、  
逃げば逃げよかし。

逃げるがいい。保輔のことが心配だ」と言って、再び元のところに走って帰って見

保輔が事許無し」

ると、まだ田の中で蛙が喰らい合うかのように、上へと下へと張り合った。保輔は  
力の強い勇士であるといっても、中途半端に武器を身につけているので、綿嚙<sup>(拾</sup>  
参)・引合<sup>(拾肆)</sup>から泥がついて、だんだん体が重くなり、延尚は狩衣も小袖も引きち  
ぎって捨てたので、それほどまで体も重くなく、ひよっとすると、保輔が負けそう  
な様子が見えたが、太刀も腰刀も全て落としてなかったもので、刺そうとすることも  
出来ず、互いに息をつぐことが出来ないで、ただ蠢いているだけである。斎明はあ  
ちらこちらで責められた者の死骸をたくさん泥の中に投げ入れて、その上を歩いて  
延尚の髻を掴んで引き寄せ、とうとう首を掻き切り、保輔を助け引き上げて再び行  
方知れずとなってしまった。この時、もし延尚がいなかったならば、式部大輔(匡

衡)も討ち殺されていらっしゃるはずだったが、「有能な家臣などは持つべきもの

討たれ給ふべかりしに、 「好き郎等は持つべき者なり」と、

である」と、これを聞いたどの人も、(延尚の死を)惜しく思わない人はいなかつ

是を聞きける 人毎に惜しまざるは無かりけり。

た。

---

## 注釈

※壺・右京亮……右京を管轄し、司法・行政・警察などを担当した役所の二等官。

※貳・左京大夫……左京を管轄し、司法・行政・警察などを担当した役所の長官。しかし、第百八話にて藤原致忠は「右京大夫」とあり、実際に致忠がついた役職は右京大夫であるため今回は筆者の間違いかと思われる。

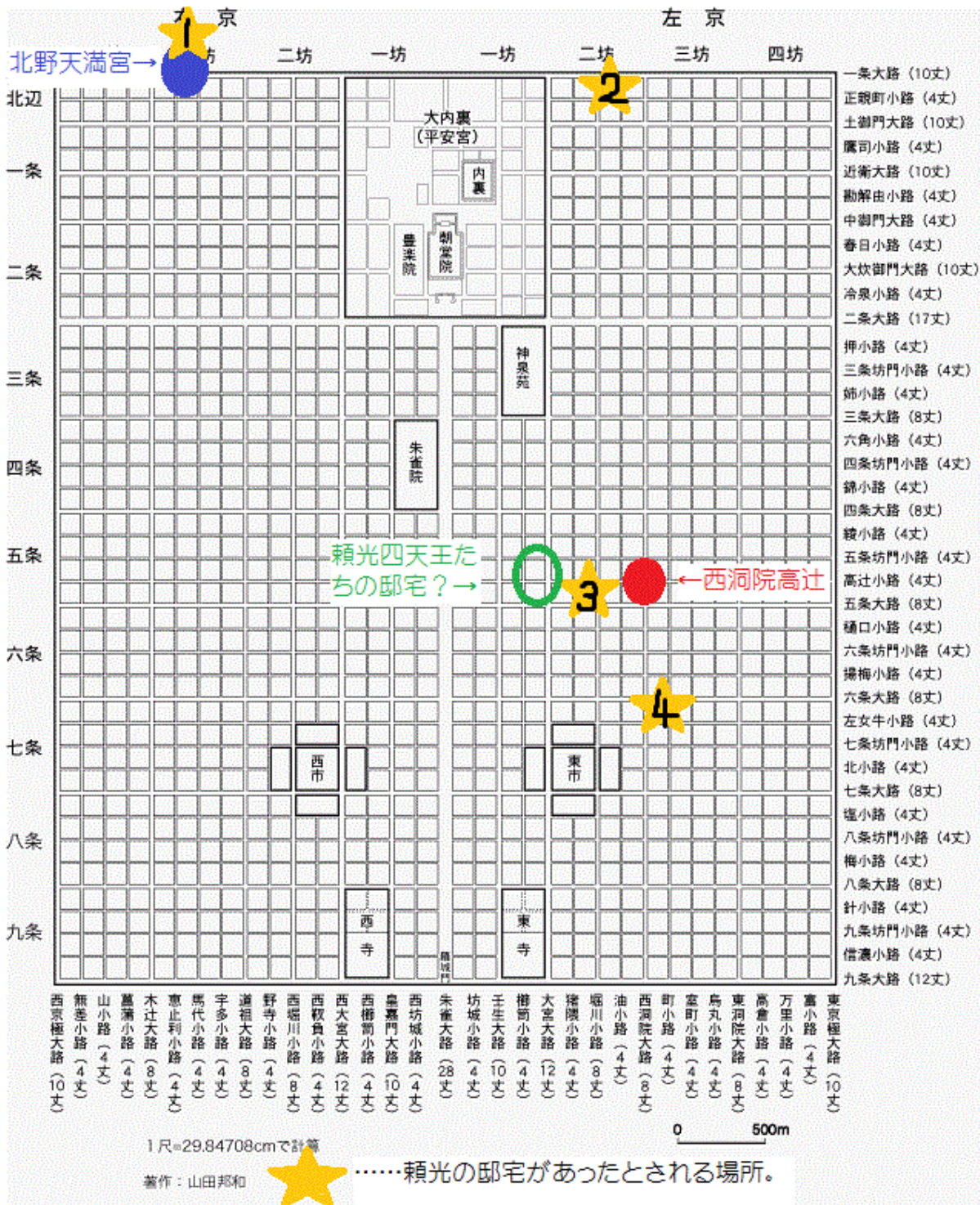
※参・右兵衛尉……内裏の警護や行幸などにお供した武官の役所の三等官。

※肆・天慶の西戎……藤原純友のことか。

※伍・西洞院高辻……図1に記す。

図1





※こちらの図は「平安京探偵団 (<http://homepage-nifty.com/heiankyo/>)」様より拝借し、加工いたしました。

※※※訳の引用・スクリーンショットなどは、作品名及び本サイトのURL (月下庵/<https://gekkaanzentaiheiki.wixsite.com/mysite>) をご記載いただけましたらご自由にさせていただいて結構です。※※※

\*\*\*\*\*

<諸説ある頼光の邸宅>

ここで、地図上におとした頼光の邸宅について確認しておく。

1……京都洛外大徳寺南、今宮神社の御旅所の西の若宮神社の位置。『雍州府志』にその記載が見られるが、確証には乏しい。

2……一条戻橋の程近く。『栄華物語』、『小右記』、『御堂関白記』に多く記載が見られ、頼光の住居として最も信憑性がある。しかし、『小右記』にてこの邸宅を得たのは長和二年（1013年）であるため、この時点では入手はしていないと思われる。

3……西洞院高辻に近く、五条大路与堀河小路に接する。現在その場は「来迎堂町（らいこうどう）」と呼ばれており、『京羽二重』にて、頼光がそこに住んでいたからということになっている。また、『京羽二重』ではこの近くに頼光四天王の家もあったとされている。

4……六条左女牛の六条若宮・左女牛八幡といわれる、昔の若宮八幡宮の場所？。『雍州府志』では頼光の弟である頼信の子孫である八幡太郎義家の邸宅があった場所とされ、臈谷氏は頼光との関係が示唆している。

以上が頼光の邸宅があったとされる場所である。一条の邸宅以外は、事実は確証とはいかないが、もしも、この場所に頼光邸があったとしたならば、時期的に2番以外の場所が作中での頼光邸として、おそらく保昌は西洞院高辻へ向かい、保輔と出会った。108話にて、頼光邸から北野天満宮まで土蜘蛛の血が滴っていたという記述があることから、1番の場所が有力か。

保昌の邸宅に関する資料は未確認であるので、もしも分かれば、作中の保昌の動向及び頼光の邸宅の場所も分かるだろうか。しかし、本作品もあくまで創作物であるので、藤元元が頼光邸の場所まで考慮して物語を書いたとは言い切れない。訳を進めれば分かることもあるかもしれないので、今後の物語の展開を待たれたし。

(参考文献：臈谷寿『源頼光』吉川弘文館 1968年)

\*\*\*\*\*

※陸・臨時の祭り……例祭でなく、臨時に行う祭り。

※漆・山崎の離宮……京都府乙訓郡大山崎町に鎮座する離宮八幡宮のことと思われる。

※捌・尾花……薄のこと。

※玖・番頭……武家の番衆（殿中や本陣に宿直して警固に当たった者）の長。

※拾・仕丁……貴族の家や寺社などで雑役に使われた下男。

※拾壺・布衣……布製の狩衣。

※拾式・露(図2)……狩衣・水干・直垂などの袖くくりの紐の垂れ下がった部分。



図 2

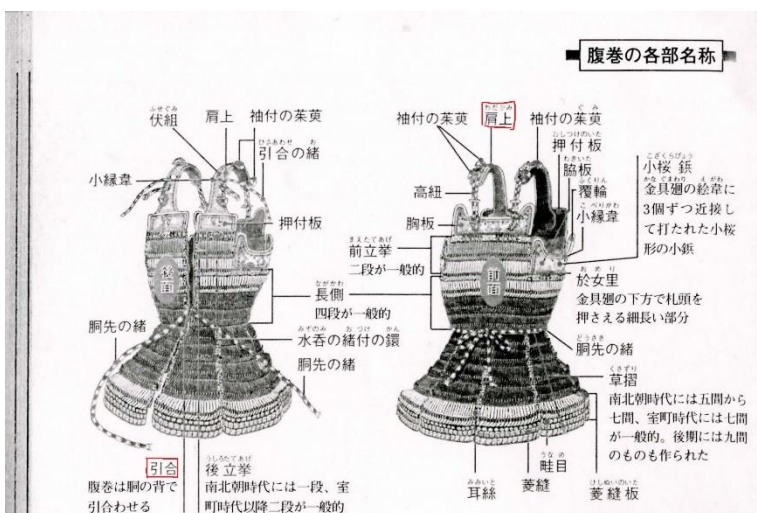


(井筒雅風『日本服飾史 男性編』光村推古書院 2015年 74頁より引用)(浄衣は白衣の狩衣)

※拾参・綿(図3)……肩上・綿上とも表記。鎧の、胴を吊るために両肩に当てる幅の細い所。

※拾肆・引合(図3)……鎧の右脇で胴の前と後ろとを引っ張り合わせる所。

図 3



(笹間良彦監修・棟方武城執筆『すぐわかる日本の甲冑・武具』東京美術 2004年 71頁より引用)

※※※訳の引用・スクリーンショットなどは、作品名及び本サイトのURL (月下庵/<https://gekkaanzentaiheiki.wixsite.com/mysite>) をご記載いただけましたらご自由にさせていただいて結構です。※※※

保輔と斎明の登場です。この二人は実際に盗人をしていたらしいですね。保輔は『今昔物語集』や『宇治拾遺物語』に登場する「袴垂」という盗賊のモデルだと言います。両物語では、今回の保昌を着け狙った袴垂が、保昌に着物を与えられるという話があるようで、その中で袴垂は保昌に恐怖したようです。いずれ訳してみますね(\*^▽^\*)

今回の話は深読みするとなんだか切ないです……。保輔は憎く思う保昌に情けをかけられて、一体何を思ったのでしょうか……。この二人の関係性は考えさせられるものがありますね。

斎明に関しては資料が少ないので語ることは少ないのですが、彼は中3の頃からこの作品を訳してきた私にとって、物語中で一番好きなキャラクターです。戦う様がカッコイイんです、彼……。次回で斎明が活躍しますので、どうぞお楽しみに。 将門がかっこよくてたまりません……。

感想・指摘・叱咤激励、随時受け付けております。Twitter やメール等でご連絡ください m(\_\_)m

公開：2015/10/31

改訂：2021/3  
海熊童子